

令和 7 年度
第4回 ふるさと常陸太田の歴史散歩

令和7年12月7日（日）

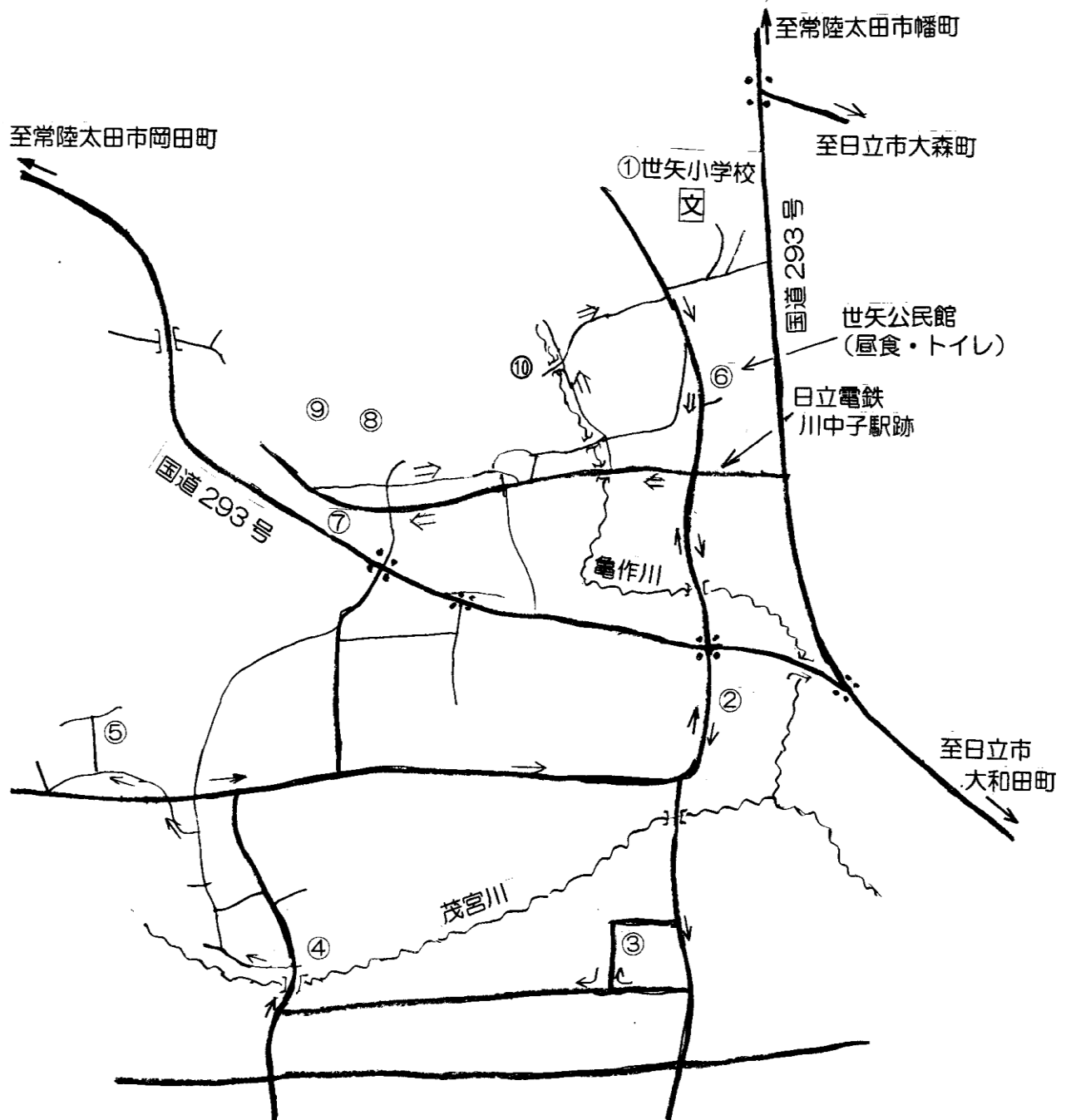
～ 小目の里めぐり ～



廃線前の日立電鉄川中子駅風景（2005 年 2 月撮影）

常陸太田まちかど案内人の会

令和7年度 第4回 ふるさと常陸太田の歴史散歩散策コース
～ 小目の里めぐり ～



< 日程 >

- ①世矢小学校 → ②雷神様 → ③黒澤西蔵 生家 → ④豆飼 石仏群 →
9:30 発 10:00 10:30 11:00
- ⑤薬師堂と竹腰権左衛門の墓碑 → ⑥世矢公民館 (昼食・トイレ) →
11:20 12:00
- ⑦ガシマケ地蔵 → ⑧鷹房神社 → ⑨小目館跡 → ⑩木内玄民の墓碑 →
13:00 13:20 13:30 13:45
- ①世矢小学校
14:20 着

第4回 ふるさと常陸太田の歴史散歩

～ 小目の里めぐり ～

目 次

1. 小目尋常高等小学校	・・・・・・・・	4
2. 雷神様	・・・・・・・・	5
3. 黒澤酉蔵 生家	・・・・・・・・	6
4. 豆飼 石仏群	・・・・・・・・	7
5. 薬師堂と竹腰権左衛門の墓碑	・・・	8
6. ガシマケ地蔵	・・・・・・・・	9
7. 鷹房神社	・・・・・・・・ 10、11	
8. 小目館跡	・・・・・・・・ 12、13	
9. 木内玄民の墓碑	・・・・・・・・	14

1. 小目尋常高等小学校

小目尋常高等小学校は、鷹房神社鳥居右側の民地一帯の敷地が学校跡である。

明治5年(1872)に発布された学制は、「邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん事を期す」と国民全体に教育を受けさせ、さらに「幼童の子弟は男女の別なく、小学に従事せしめざるは、其の父兄の越度たるべき事」と規定し、子弟は小学校に入らなければならないものとした。

明治時代市内で最初の高等小学校は、明治20年(1887)の郡立太田高等小学校の創設が最初である。最初は、郡で1校だけで、その後2校、3校となり、明治23年(1890)の小学校令で、高等小学区は、一町村を以って設置することとし、尋常小学校に併設されることを許し、明治25年を以って郡立は廃止された。

太田町立高等小学校の創設期における予算を見ると、70%が授業料で、80%が人件費である。生徒一人の月謝は30銭であった。

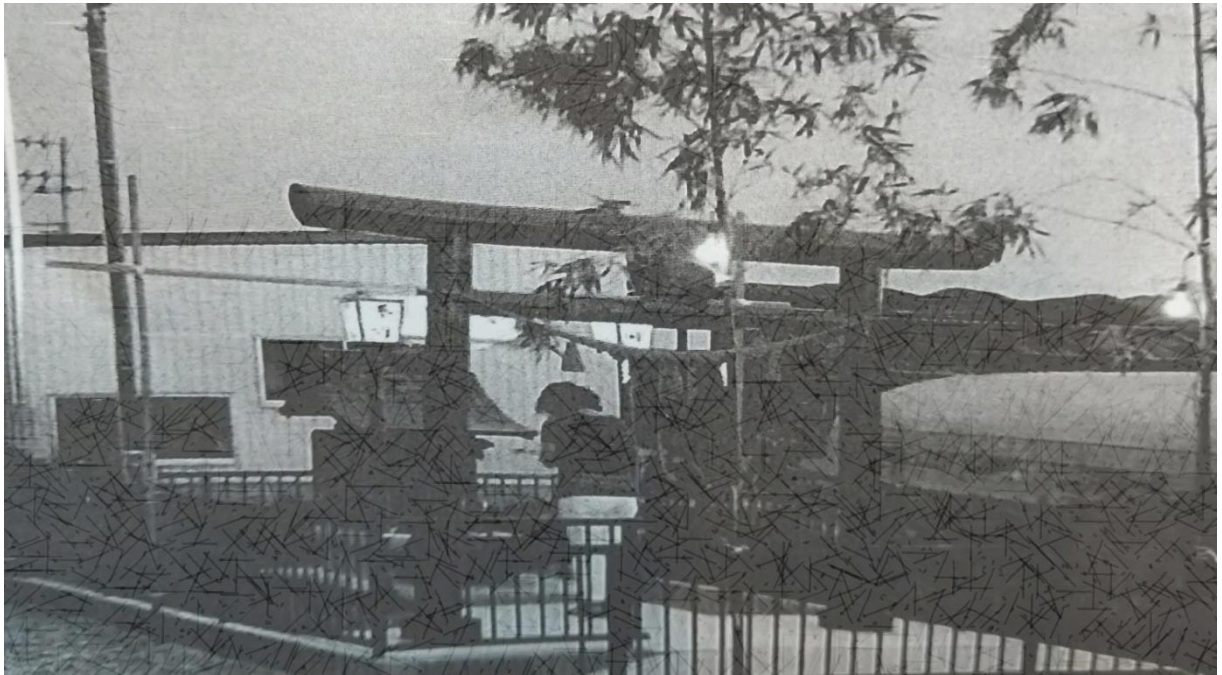
市内の当時の村部での創設時期は別表の通りであるが、常陸太田地方の高等小学校は、独立の太田高等小学校をはじめ併設の4校が存在しただけで、高等小学校のない地区の生徒は、上級の勉強をつづけるためには、近くの高等小学校に通わなければならなかった。

校 名	位 置	創立年月	修業 年限	学校数	元 正 学 徒		半 正 学 徒		授業料 総 額	給 費 総 額
					男	女	男	女		
太田尋常高等小学校	太田町字中城	明治25年7月	4年	6	275人	236人	13人	11人	358円	1,642円
太田尋常小学校	同 上	明治6年6月	4	9	244	106	17	14	1,171	1,369
機初尋常小学校	機初村大字機	明治6年6月	4	2	107	53	2	8	131	460
小目尋常小学校	世矢村大字小目	明治21年8月	4	2	93	43	0	0	101	36*
真弓尋常小学校	同村大字真弓	明治6年12月	4	1	87	12	0	0	195	443
西小沢尋常小学校	同村大字西小沢	明治6年10月	4	1	61	25	1	1	60	294
幸久尋常小学校	幸久村大字上河合	明治19年6月	4	2	116	74	2	1	104	390
幸久尋常小学校	同村大字幸久	明治12年1月	4	2	12*	15*	3	0	64	314
谷河原尋常小学校	同村大字谷河原	明治12年	4	2	68	42	5	1	322	409
天神林尋常小学校	同村大字天神林	明治12年	4	1	42	18	1	1	45	220
稲木尋常小学校	同村大字稲木	明治7年11月	4	1	37	24	3	1	70	285
新宿尋常小学校	同村大字新宿	明治6年	4	2	28	19	2	0	35	157
瑞龍尋常小学校	同村大字瑞龍	明治26年9月	4	2	99	55	3	0	14	266
上大門尋常小学校	同村大字上大門	明治7年6月	4	1	50	35	1	3	79	211
佐都尋常小学校	同村大字佐都	明治6年2月	4	1	42	19	0	0	57	160
町屋尋常小学校	同村大字町屋	明治25年10月	4	3	109	55	1	6	123	600
西河内上尋常小学校	同村大字西河内上	明治7年6月	4	1	53	3	2	0	154	400
		明治7年6月	4	2	78	36	2	1	25	222
		明治7年6月	4	1	46	10	10	3	25	222

出典)「茨城県学事第二年报」(茨城県歴史館所蔵)

注) *は原文のままとした

2. 雷神様



地元では由緒ある神社として祀られている。毎年、7月18日には「お田植え祭」が行われ、多くの参拝者でにぎわう。「水戸別雷皇太神」の分社で。川中子地区では、11月3日本社に代表が参拝している。

現在の祠は、平成27年10月4日に道路拡張に伴い移転した。

「ふるさと小目見て歩き記」

水戸別雷皇太神は、関東三雷神の一つで、佐竹氏や水戸徳川家の産土神として信仰される由緒ある神社である。

御祭神は、別雷命（わけいかづちのかみ）。御神徳は、雷難消除、武運長久。桜田門外の変の水戸浪士たちが成就祈願をしたとされる。境内には蛙が雷神様のお使いとして祀られている。また、東海村の原発の守護神としても祀られている。

神亀元(724)年、常陸国主であった藤原宇合（藤原不比等第3子。式家の祖）は持節大將軍として蝦夷の反乱を平定するが、その際、東北地方鎮護の神として京都の上賀茂神社より御分霊し、水戸に祀ったとされて、水戸第一の古社とされる。

同社 HP より

賀茂別雷神社(上賀茂神社)。

御祭神は賀茂別雷大神(かもわけいかづちおおかみ)。

御神徳「厄除」「方除」「開運」「八方除」「雷除」「災難除」「必勝」「電気産業守護」

天武天皇 6(677)年山背国に賀茂神宮を造営。桓武天皇平安遷都以降、皇城鎮護、山城国一宮として歴代天皇の行幸・奉幣祈願があり、伊勢神宮に次ぎ官幣大社筆頭となる。

賀茂別雷神社 HP より

3. 黒澤酉蔵 生家（酉和館）^{ゆうわかん}

酉和館建設委員長である磯野保氏の館建設記録簿によると、その第1ページに黒澤酉蔵先生より書面にて、『黒澤家の屋敷、和夫（弟）所有の宅地・農地および家屋2棟を新沼地区に寄附し、児童・生徒のための体育施設また地区集会所などに利用してもらいたいが如何であろうか。』との書き出しがある。

時に昭和44年10月11日、その日が酉和館並びに運動広場の幕開けであり、それから約1年間、委員長はじめ委員の懸命の努力と苦勞のはじまりであった。

こうして委員の方々と地区の人達の努力・協力が報いられ、昭和45年12月18日、酉和館の竣工式が盛大にとりおこなわれた。

昭和46年元旦祭が竣工なった酉和館で催され、それまで各戸持ち回りでおこなわれていた地区集会在ここに終了した。昭和46年7月1日には常陸太田市との土地建物使用貸借契約書を取り交わし、酉和館運営委員会会則によって正式に発足した。（酉和館の名称は黒澤酉蔵、和夫兄弟に因んでいる。）

所 在：常陸太田市小目町字西妻2478番地

土 地：4,000 平米

建 物：居宅 19.5 坪、倉庫 10.5 坪、講堂 30.0 坪

寄 附：造成費 165 万円、建築費 185 万円、諸費 60 万円、

運営基金 200 万円の合計 610 万円が黒澤酉蔵先生より寄贈

黒澤酉蔵先生メモリー

- ・明治18年3月28日、茨城県久慈郡世矢村字小目に父黒澤元之助・母イノの長男として生まれる。
- ・同38年3月、東京にある京北中学校卒業
- ・同34年12月、田中正造代議士と共に足尾銅山鉱毒事件に関与し、被害住民の救済に奔走。
- ・同38年7月、北海道に渡り、札幌の宇都宮牧場で見習いとして住み込む。
- ・大正4年4月、瀬尾梅江と結婚。（子供6人をもうける）
- ・同12年9月、関東大震災。アメリカから大量酪製品入り、北海道製酪工場。
- ・同14年5月、北海道製酪販売組合設立。専務理事就任（現雪印乳業の母体）
- ・昭和17年4月、北海道5区から衆議院議員に立候補し当選。
- ・同35年1月、酪農学園大学開校。
- ・同56年11月、勲一等瑞宝章受章。
- ・同57年2月6日、北海道札幌市にて逝去、96歳。

「酉和館創立20周年記念誌、希望をもとめて（黒澤酉蔵の生涯）」



4. 豆飼 石仏群



当石仏群は、豆飼地区に散在していた馬力神や二十三夜供養塔など 19 体を、昭和59年11月に1カ所に集めたものである。（右端に改修記念碑有り）

＜集められた石仏など＞

（1）馬力神

馬の守護神として知られる（信仰される）**神様**で、特に愛馬の冥福を祈るために石碑を建てる風習が江戸末期から昭和初期にかけて盛んに行われてきた。

（2）馬頭観音・馬頭観世音・馬頭尊

馬頭観世音（ばとうかんぜおん）とも呼ばれ、馬の守護神として知られる（信仰される）**仏様**である。馬が草を食べるように、人々の煩惱を食つくし、災難を取り除いてくれると言われている。

なお、馬頭観音像は、頭上に馬の頭を載せた姿で憤怒相をしている。これは、悪を打ち破り衆生を救う慈悲の力を示している。

＊馬頭観音と馬頭尊の違い：馬頭観音は仏教、馬頭尊は神道を表している。

（3）二十三夜供養塔

二十三夜とは、旧暦の11月23日夜などに行われた、講員が宿に集まって飲食をともにしながら、昇ってくる月を拝んで無病息災や五穀豊穡などを祈願する行事であり、供養塔はその記念に造立されたものである。

株式会社平凡社「世界大百科事典（旧版）」

「ひたちおおたてくてくウォーク^{⑤2}

小目ハイキングコース」

5. 薬師堂と竹腰権左衛門の墓碑

信州出身の浪人算家竹腰権左衛門の墓は、小目町の豆飼共同墓地にある。権左衛門が小目に移ってきたのは文化11年（1814）頃であった。

小目村豆飼の庄司三代三郎の別棟に住み、主としてここを教場にして没するまでの10数年間、地元の人々に手習いや和算を教えた。権左衛門は若い時から各地を遊学し、多くの算家と交際し各種算法を身につけていた。塾で使用した教科書や演習帳を見ると、その内容も加減乗除、利息、田積等の計算法や複雑な平面図形等に関するものまでさまざまである。

権左衛門の高弟中村八郎は、小野村（瑞龍町）の和算塾で多くの塾生たちを指導した。文化、文政期以後の和算の普及はめざましく、この普及によって、洋算（西洋数学）が採択された時も、余り抵抗なく理解できたといわれている。



「常陸太田市の歴史散歩」

6. ガシマケ地蔵



ガシマケとは、日常的に凶作、欠食の危機にさらされ逃げ場や支えを失い食べ物も尽きて餓死してしまう事で、特に青森、津軽地方では餓死負ける（飢えに負けて死ぬと言う表現）が、地域語として定着したものであり、ガシマケ地蔵は餓死した人の為に地域が建てた供養地蔵である

江戸時代には飢饉が多かったが、その中でも享保・天明・天保期の飢饉は三大飢饉として、その被害が大きかった。天明の飢饉は特に東北地方で冷害による被害が甚だしく、多くの飢餓人を出した。なかでも天明3年(1783)から同7年までの全国的な大凶作は、幕藩体制に大きな動揺を与えた。その後、水戸藩の天保改革が行われていた時期にも凶作飢饉に襲われ、藩の支配体制に重大な衝撃を及ぼし、人心の動揺を引き起こしていった。天保期の飢饉は天保4年(1833)、同7年、8年、9年と続くが、特に7、8年の惨状は甚だしかった。

当時の諸記録によると、天保七年の東北地方の飢饉状態はとりわけひどく、秋田、米沢、福島などでは何日も食物を口にする事が出来ず、食料を求めてうろつく者が道端に倒れていたり、津軽地方では一万人からの流民が秋田藩領に流れ込む等の記録がある。

これらの様子は岩城地方でも同様であったから、少しは食料事情の良いとされた常陸方面への流民はあとを絶たなかった。とりわけ水戸領では早くから救民対策（光圀時代の郷蔵、斉昭時代の常平倉）が取られていた事もあって、他領より比較的事情がよかった為、噂を頼りに、東北地方各地より水戸領に流入する物が多かった。又、力尽き死ぬ物も多かった。

これらの犠牲者達を埋葬し供養したのが馬場の正林院墓地の無縁仏供養塔であり、後太田へ移したとあるのは木崎の梅照院墓地を指し同じ供養塔が建っている。又、小目町の三体の石地蔵は「ガシマケ」を供養する為に建てられた物であるとの言い伝えがある。

『常陸太田市史』 通史編上

7. 鷹房神社



御 祭 神：健羽槌命（たけはづちのみこと）

境内神社：愛宕神社、八幡神社、須賀神社、稲荷神社、秋葉神社

御 神 徳：紡績、裁縫、産業開発、武勇神

祭 祀 ：例祭 旧暦 4 月 8 日

由緒沿革：

康平年中(1058-64 年)、源頼義奥州征伐の途次、この宮社を建て、誉田別尊を祭る。その後、元禄年中(1689 年)に改めて健羽槌命を祭る。

（稲木町の高房神社と同じ経過）

頼義東征の折、軍馬をこの地に留め休息をとる、時に鷹が本殿後方の矢篠の群生に稲穂を咥え飛来してとまり、その稲穂を落とす。村人が、その稲穂を種子として作りしところ、豊作をもたらし、以来、その矢篠を御神体と仰ぎ拝み、社名も鷹房神社と名付けられたと云う。

御神体はきちんと本殿の中に納められていることが多いが、自然の姿のままなのは珍しい。この矢篠は、余り増えも減りもせず、増えたものを刈っても、けっして神域から持ち出してはいけない。この禁を破った者には、かならず罰があると言われている。

（久慈地方神社総代会）

御神体：

「矢篠」、拝殿のすぐ後、高さ約 4m の矢篠の群生があり、それを囲むように瑞垣廻らされている。自然の姿の矢篠が、そのまま御神体になっているのは、非常に興味深い。謂れは、前述の通りで、村人たちがその粃を頂いて、自家の粃と併せ苗を作り植えた処、豊作がもたらされたので矢篠を御神体にし、鷹房神社の名前も其処

から出ていると云う。篠(シノ)は常緑のイネ科植物であり、古来、神霊の憑依物としての信仰があり、それが御神体となったものと思われる。

※鷹房神社の例祭

明治の初めまでは、オイソイレ(お磯入れ)とか、イソサガリ(磯下がり)と称して、水木浜までご出社していた。その後、水木浜へのご出社が大変なので、浜から大きな磯石を持ってきて、鳥居のすぐ側に安置し、「磯降り石」と称して、そこまでご出社する形に変えた。

祭りの準備は、「磯下がり神事」の中で、最も大切な役割を果たす鉾持ち 10 名の稚児選びから始める。五つの小字(高井、川中子、平宿、新沼、豆飼)から各 2 名ずつ選ぶが、稚児選びは氏子総代が中心になって行う。稚児の資格は、就学前の男子、やむを得ない時は女子も可。次は大将を 1 人選んで、他の 9 人はお供となる。大将は、各小字の持ち回りで、平宿→川中子→新沼→豆飼→高井の順である。大将を出す小字が当番となり、鳥居の太いシメ縄をもじり、「磯降り石」の周囲に建てる忌竹、及びシメ縄を準備する。

祭りの当日、大将を出した家では、お赤飯、お煮染めを、お供を出した家では金一封を持参して神社に上がり、特に 10 名の稚児と同姓の者も一緒に参拝する事になっていた。

祭事では、社前に稚児、氏子が着座して神事を行う。大将が持つ大きくて立派な一番鉾に神霊が宿るようにとご祈祷し、各々の持つ鉾に新しく御幣を重ねる神事を行う。

祭事の後には、「磯降り石」まで行列を組む。露払い→大将→お供数人→神官→お供数人→総代→参列者の順と云う。「磯降り石」の前に着くと、「磯降り石」に鉾を立て掛け、着座して神事を行う。「磯降り石」を海に見立てるかの様に供物をし、神事では一番から十番の鉾を持った稚児が、次々に玉串を捧げて、次には総代代表、参列者代表が玉串を捧げる。「磯降り石」の前での神事がすむと、再び神前に戻り直会(なおらい)を行う。

『陸太田市史』 民俗編

他の神社の浜降り祭として＝武蔵国総社大國魂神社のくらのやみ祭（4 月 30 日～5 月 6 日）～全国的に著名な行事

毎年 4 月 30 日品川沖海上禊祓式（潮汲み、お浜降り）

＜府中（午前 9 時 30 分に出発）→（甲州街道）→金子（調布市西つつじヶ丘）→豪徳寺（世田谷）→（品川用水路）→馬引沢（上馬・下馬）→目黒不動（門前で休憩）→氷川神社（桐ヶ谷）→安楽寺（西五反田。勅使品川宿滞在時の緊急避難場所）→居木（いるぎ）橋（目黒区大崎）→南馬場→荏原神社→海上禊祓式→同じ道に戻る→府中（午後 4 時に帰着）＞

「潮盛り」とも呼ばれる神事で、神職一行が品川海上に出て身を清めるとともに「清めの潮水」を神社に持ち帰り、大祭期間中の朝夕潔斎時には、この海水を使用する。

大國魂神社 HP より

8. 小目館跡 常陸太田市小目町字宮西

小目町から岡田町の台地には四つの城館跡があり、東から小目館（東岡田館）、高井東館・高井西館（旧名称後岡田館）、岡田館（旧名称西岡田館）、西岡田館（土塁等遺構らしき物あるが工業団地で地形破壊されている）が、常陸太田市の城館遺跡地図に記載されていない（最近遺構確認された）。

小目館址（旧名称東岡田館）、高井東館址（旧名称後岡田館）は、現小目町であり、高井西館址、岡田館址、西岡田館は現岡田町である。



小目館(東岡田館)址遠景

注：西岡田館址を除く小目館址・高井館址・岡田館は常陸太田市文化財係が調査した城館名。題字のカッコ内は常陸太田市史氏編纂委員会資料、及び川崎春二氏の調査城館名である。高井館の高井西館・同東館址・西岡田館址は便宜上つけた城館名である。

小目館址は、茂宮川左岸丘陵上、小目町北方の標高約 35m 台地上に立地し、東は茂宮川の低地で北は山地であり、南側は急斜面で、西側は 2 つの谷津が入り込み、小目町鎮守の鷹房神社境内及び山林の西の堀を隔てた所にある単郭の館であり、北西側が台地続きで山地を 5～600m 位進んだ所に高井館跡がある。

鷹房神社山林西側と本郭東側の堀は全体に浅く 1m 位の深さで、本郭東側から北方へ向かいさらに西方の傾斜地に落ちている。

東側の堀は北へ進むと深くなり、西方への曲がり角に高さ 2m 位の土塁が 15m 位あり、西方に廻った堀は本郭からは 1m 位と浅く、西側に進むにつれて深くなり最終で 2m 位ある。

虎口(出入口)は、本郭南西側の隅からの道があり、その道は直ぐ西へ曲がり下っている。本郭東側の堀の南側には曲輪があり、さらに本郭の南東隅下にも腰曲輪と思われる平坦地があり、本郭西側の南の方は尾根があり尾根部に腰曲輪が 3 段構築されている。

小目館は、縄張りとしては広いようで、遺構はっきりせず堀は 1m と浅く、広さは 5m 位有る様だが堀の役目はしなく、土塁も一部しか残存せず、後世に畑としたので破壊された様である。

小目館の築館と館主は、小目館址も資料が乏しく、築館は、佐竹 5 代義繁(重)三子義澄(義高)が、鎌倉時代中期この地に配され築館し岡田氏を称したと伝えられているが、その子孫も居館としたが、義行以降何時まで続いたか不明である。

岡田氏 2 代盛光の二子義連は、真崎城(那珂郡東海村字村松)を築き居住し真崎氏を名乗り、岡田氏より分家した真崎氏は、本家をしのいで、佐竹一門でも有力な家臣となり、14 代宣広は、義宣に従って秋田へ下向し 1,300 石を与えられ家老に列したという。

その反面本家筋の岡田氏は、数代続いたがその後ははっきりせず、秋田の佐竹家臣系譜にも記載されていない様である。

〔参考〕

真崎氏は 4 代義景の時、建武 2 年(1335)中先代の乱に佐竹 9 代貞義に従い、武蔵国鶴見で討死する。

11 代直義は、永禄中(1558～1570)には佐竹 18 代義昭に従い、奥州寺山城(福島県東白川郡棚倉町)攻めで軍功を挙げている。

12 代義保は、元亀 4 年(1573)南摩の戦(栃木県鹿沼市上南摩・下南摩町)にて討死し、弟重宗はその場において兄の敵を倒し、佐竹 20 代義宣はその功を賞し官状を与え、真崎 13 代をつがせた。

真崎氏は、佐竹軍の船奉行であったようで、文禄元年(1592)の文禄の役には、一族の真崎宣宗が大和田重清と共に軍船の引き取りを行っている。

文禄 5 年(1596)、真崎 14 代宣広は義宣蔵入地である湊(ひたちなか市)2,113 石の管理を任せられ、湊の港湾の管理者に任命されている。

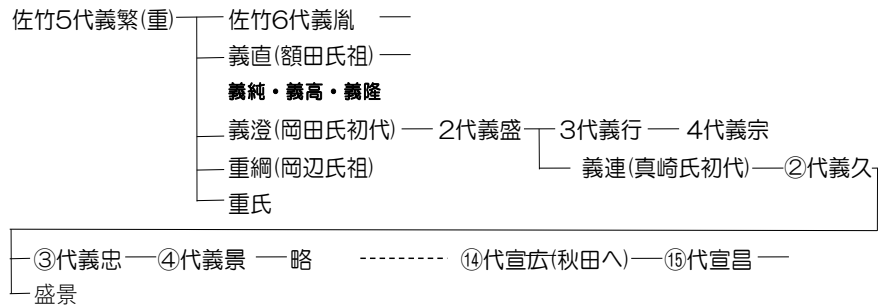
参考文献：

新編常陸国史・水府志料(茨城県立歴史館解説)・佐竹氏系譜・佐竹氏関連城館・佐竹家臣系譜(以上常陸太田市史編纂委員会)・中世東国大名常陸国佐竹氏(江原忠昭著)・奥七郡の城郭史と佐竹 470 年史(川崎春二著)・東海村史(東海村史編纂委員会)・埋蔵文化財包蔵地調査書(常陸太田市教育委員会)

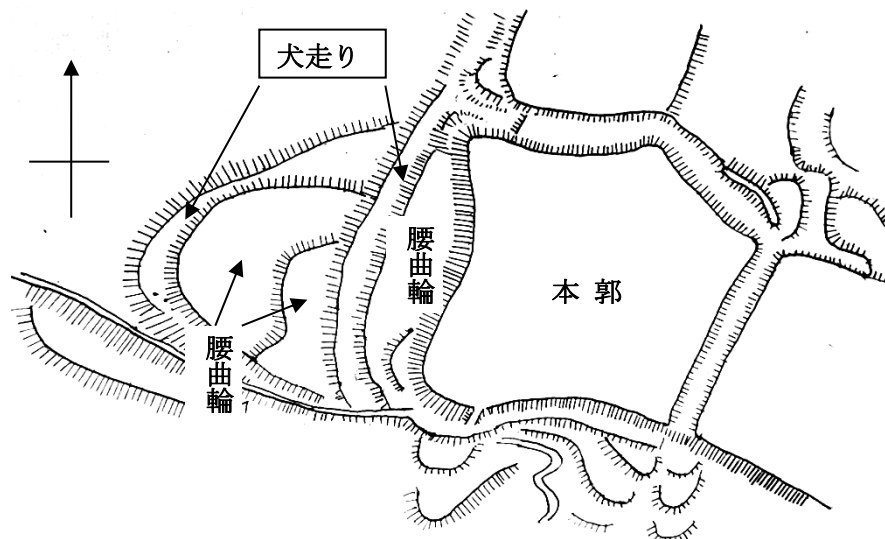


真崎城址遠景(山の突端部)

＜岡田氏・真崎氏略系＞



小目館址(東岡田館)概念図(インターネット余湖概念図を参考に改図)



9. 木内玄民（きのうち げんみん）の墓碑

木内玄民の墓碑は、小目町の荒代共同墓地内にある。

墓碑は、医者として里人の為に奔走した玄民の息子玄節が建立したものである。

木内玄民の遠祖は小田原北条氏政に仕えていた。家臣である木内八衛門は、天正年中（1573～1592）上州での合戦において手柄を立て、氏政より謝状をいただいたという。

しかし、北条氏は天正 18 年（1590）豊臣秀吉によって滅ぼされ、北条氏滅亡後は木内家も没落浪人となってしまいが、寛永（1624～1645）年中に水戸徳川家に仕え、100 石を賜って与力になったという。八右衛門の二男道悦は医を業として小目村に移り、この子孫は代々小目村に住み医者として地域住民のために尽くした。



玄民は木内家が小目に移って5代目で、名を政芳といい春伯と称した。

墓碑には、次のような内容が書かれてある。

木内八右衛門、天正年中、槍、剣の道にすぐれていた。久慈郡小目村で医を業としていた。子孫はこの志を継いだ。五代目の後胤は諱を政芳といい、春伯先生と称した。先生は里人を守る為、里人を招き医術の問いに細やかに答えた。診療は風雨、晩、遠方の隔てなく奔走した。先生は文化元年（1804）甲子三月三日、六十二歳でこの世を去った。多くの村民が葬式に参列した。妻は飛田氏の出身で、子は2男2女有り、皆学にすぐれていた。 天下野村 木村謙撰文

墓碑を建立した玄節は明和6年（1769）に小目村に生まれ、天明4年（1784）6月水戸藩医原南陽の門に入り、文化3年（1806）に郷医になっている。文政5年（1822）格式十人上座藩医並に昇格し、同年居所を小目村から水戸城下に移している。その後、天保「元年（1830）には進徳番次座格になるが、同」4年65歳で亡くなっている。なお、文章を書いたのは木村謙次で、北方領土の探検で有名な探検家である。

玄節の玄孫（5代後）には、終戦後の彫刻界を代表する作家の1人である木内克がいて、昭和49年の茨城国体の時の主会場である、笠松運動公園内に6mの「女神の像」が残っていて、玄節と同じ水戸市酒門町の酒門共有墓地と一緒に眠っている。

< 参 考 >

1. 常陸太田の梨

常陸太田市はぶどうに並び、梨の生産が盛んに行われている。梨の生産は、市の南部の平地を中心に点在しており、完熟するまで木に実らせたものを収穫して販売する観光果樹(直売)が中心で、一番美味しい甘くて完熟した梨を味わう事ができる。

常陸太田市の梨の樹は、約 130 年前の明治 10 年頃に県下に先駆けて植えられた。度重ねる久慈川の氾濫に耐え、先人達が技術を磨き、現在の JA 常陸・常陸太田梨部会に引き継がれている。

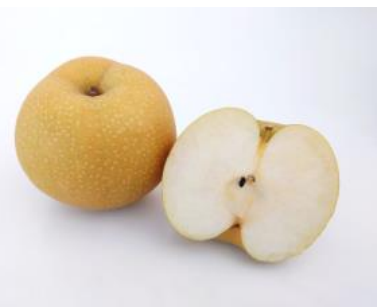
令和 6 年 3 月末現在、常陸太田市内では、JA 常陸・常陸太田梨部会 22 名が梨栽培をしている。JA 常陸・常陸太田梨部会によると、令和 6 年産の市内梨栽培面積は 9.4ha、収穫量 222 トンとなっている。

(1) 主な梨の種類

○幸水

「菊水」と「早生幸蔵」を交配し、昭和 34 年に登場した赤系梨。

現在では日本梨の約 40%を占める代表的な品種である。果実が約 250～300g の扁円系



で、お尻の部分が大きくへこんでいるのが特徴。酸味は少なめで糖度が高く、やわらかい果肉には果汁がたっぷり含まれる。果皮は基本的に褐色ですが、やや黄緑がかったものもある。

◇収穫時期 8 月中旬～下旬頃

○恵水

平成 23 年に品種登録された茨城県オリジナル品種である。

比較的新しい品種であるが、市内でも生産が増えてきている。大玉で食べ応えがあり、果汁たっ



ぷりでみずみずしくシャリシャリした食感が楽しめる。“ご贈答にもおすすめ”

◇収穫時期 8 月下旬～9 月下旬頃

常陸太田市農政課ホームページより

2. 常陸太田市 梨栽培の経営体数及び栽培面積

○経営体数・面積 (各年 2 月 1 日現在)

年次 新旧市町村	年次(西暦)	経営体数	面積(露地) a
平成 12 年	2000	75	2,200
平成 17 年	2005	66	1,949
平成 22 年	2010	47	—
平成 27 年	2015	29	1,100
令和 2 年	2020	23	1,221
令和 7 年	2025	22	940

- ・平成 17 年以前は販売農家、平成 22 年、27 年、令和 2 年は経営体(団体含む)
- ・令和 7 年は推計
- ・平成 22 年の面積は調査なし
- ・数字の減少は JA 関係者によると後継者難との事

常陸太田市農政部販売流通対策課資料より

3. 「常陸太田市史余禄第五号」掲載の梨に関する記述

常陸太田市史編纂委員会編集「常陸太田市史余禄第五号」によると、

「市内では、世矢・西小沢地区を中心に梨の栽培が盛んである。品種としては長十郎・二十世紀・幸水・新水・豊水等様々な梨が生産されている。太田の梨は、美味で品性も良いと好評であり、その殆どが市内及び市の周辺市町村で消費されている。

元々、常陸太田市近辺には古くから梨の栽培が行われており、旧坂本村や東小沢村には今日でも梨屋、梨畑(大森町の田地耕宅)と呼ばれる所が残っている。記録に明らかな所では、明治 10 年、旧世矢村豆飼(現小目町)の山田吉郎平が初めて梨を植え、其の後、吉郎平はこの梨栽培を水田単作地帯における集約畑作物として有利である事を力説したと云う。

記録や口伝によると、当時の品種は小雪・常花・大平・早世赤・奥六等であった。其の後、明治 33 年吉郎平は隣村西小沢村沢目の根元久太郎・同三之介・伊坂春太郎の三名に奨めて新植させ指導に当たった。明治 35 年にその功を認められて、当時の久慈郡長兼郡農会長丹誠から表彰されている。

吉郎平が植えた梨の中に異品種が 1 本あり味、形が良く肥大であったので、これを原木として接木による増殖を奨めた。後に、この梨が長十郎である事が判明し、それがこの地方での長十郎梨栽培の初めになったのである。

この頃の苗木は、旧那珂郡五台村の車田苗木店を通じ、埼玉の興農園や千葉の錦果園等から入れたもので、後年二十世紀もこの錦果園から移入している。

こうして明治末期から大正初期にかけては、吉郎平他数名の努力によって世矢・西小沢両地区に梨の栽培者が増加し、太田梨産地の形態を整え、大正初期には、吉郎平ら 7 名によって梨栽培者の集まりを組織するに至った」とある。